

団長の独り言

「場当たりもゲネプロも終えて」

初日の朝、空を見上げると青空が広がっている。車に乗り込み、本番初日のルーティーンである「ハウンドドック」の「フォルティシモ」を流し、向かうは赤坂区民センター。

月激しく、昂る、夢を眠らせるなく溢れる想いを諦めはしないく♪

劇団ふあん設立25周年42回目の初日、毎度のことだけど、この歌を聞くと身が引き締まる。

朝9時劇場入り。

まずは全員いるかどうかの確認。

女子楽屋に顔を出し、皆さんがいるかどうかの確認しながら、女性の皆様にご挨拶。

(男性は同じ楽屋なので挨拶が出来る)

舞台監督さんと音響さんは楽屋に挨拶に来てくれたけれど、照明さんはお忙しいみたいなので、こちらから舞台へと出向き、照明さんへの挨拶も済ます事が出来、成功祈願をするにあたっての明治神宮の神様を、どちらに設置させていだだこうかと舞台セットに目をやれば、セットの上手奥の上、ちようと神棚になるような台があったので、そこに神様のお社を置き、全員集合したところで、毎回恒例となるまずは成功祈願から。

アマテアズの祝詞に合わせ首を垂れ、各自がそれぞれの思いを祈り、心を落ち着け、昨日の場当たりの続きから。

昨日、かなりいいテンポで進んだので、ラストのクライマックスから見せ場となる「立ち回り」を経て、エンディングの二人の歌姫の競演、そして全員登場しての華々しいフィナーレ、私の挨拶のあと緞帳幕が下りる…という一連の流れを、照明の色合いや音響のタイミングとバランス等をチェックしつつ進めて行く。

この一連のクライマックスでは、私演じる「中沢」の見せ場となるシーンが連続するけれど、その中でも特に立ち回りのシーンは、どんな照明で、効果音がどんな感じに入るのか等、客席からキチンと確認をしたかったので、私の代役で「立ち回り」をやってもらう人を舞台スタッフの舞ちゃん(木村舞子)にお願いをした。

彼女が稽古中から、私の立ち回りの動きをほぼ完璧に把握してくれていて、きっと彼女ならやってくれるだろう！と思い、昨日の仕込みの時に急ぎょお願いをしておいたのだが、これは実は大変な事…。

「場当たり」とはいえども、10人ほどの切られ役を相手にバツサ、バツサと切り倒し、最後の一人を袈裟切りで切りつけて、正面を向いて決めポーズをキチン取る！こうした私が行うアクションを、正確にやってもらわねば、ちゃんとした照明、ちゃんとした効果音を確認する事が出来ない。そんな重大な役回りなのに、舞ちゃんは、一度も私の代わりをやった事がなく、いわばぶっつけ本番！一歩間違えば怪我をする恐れもある。

それでも、私が舞ちゃんにその大役を託したのは、昨日彼女に「手は覚えているよ

ね？出来る？」と振ってみた際、彼女は「こうきて、こうして、それで、こうで！」と言いながら、キレのある正確で素早いアクションを魅せてくれたから。当然ながら絡みのメンバー達も、自分達の動きのチェックをしなきゃいけないので、場当たりとはいえども本気モード。プレッシャーの中、舞ちゃんはすごい気迫で、立ち向かってくれた。客席で観ていた誰もが「すげえ〜」っていうほどの完璧な動作！そのおかげで私は照明さんへの的確な指示を出す事が出来た。立ち回りの経験はないって言っていたけれど、あそこまで動けるのは、たいしたものだ。

さてさて、その「場当たり」を最後までサクサクと進め、照明も音響も、大きく変更してもらわなきゃ箇所も特になく、(細かいところはちょこちょこあったけど…)暗転中の役者も含めた場面転換も問題なく進み、場当たりは予定時間どおりに終了したので、1時間後、メイクも衣裳もバツチリ決めたの「ゲネプロ」が開始された。

(ゲネプロ…本番通り行うリハーサル(の事)みんな、本番どおりの照明、本番どおりの音響、そして素敵な舞台セットの中での芝居とあって、みんなの芝居も気合が入る。そんな共演者に刺激を受け、私も「中沢」に魂を吹き込んだみながら演じる。そして後半のクライマックスのシーン。

「明美」、「女将」、「座長」の見せ場が続き、そんな三人の話を聞いた「淳子」が中沢にある事を問いかける。

その問いに対し、「中沢」は少し間をとってから短い言葉をつぶやくのだが、私はゲネ

プロだというのに、感極まってセリフが言えなくなってしまうた。

確かにゲネプロというのは、本番と全く同じようにやらなきゃいけないけれど、これは役者のタイプにもよるけれど、私の場合、ゲネプロというのは、稽古場でやってきた事が本舞台でもちゃんと出来るのか？って事を「最終確認」するって意識が常にある。

ましてや私の場合、演出的な観点からも最終チェックしているから。なおさらゲネプロでは、あえて気持ちをセーブして、客観的に芝居全体の流れを見ているところがある。

だからゲネプロで、感極まってセリフが言えなくなるほど役の人物に集中するって事はまず無かった。

後日談だけど、本番を終えて1週間後に開催した反省会の時にたけもっちゃん(竹本和弘)がこんな事を言ってくれた。

「あそここのシーンで、『中沢』が短いセリフを言う前のほんの数秒の間で、『中沢』これまで歩んできた人生が見えました。」

いやあ〜まさにその通り！あの時は意識して間を取ったわけじゃなく、セリフを言う瞬間に、これまで自分の感情に蓋をして数十年間生きてきた「中沢」の想いが溢れてきて、それがあの数秒間の「間」に集約され、感極まってしまい、言葉が出なくなっただけだ。

それもこれも、役者、スタッフ、全ての関係者の皆さんの気持がひとつになって、素晴らしい芝居になっていたからこそ。

こうしてゲネプロも無事終え、あとは本番を待つのみとなったのでした。